

危機に立つキリスト教主義学校の性教育 ～キリスト教学校・カトリック学校調査から可能性と課題を考える～

The Christian Schools at Risk: An Examination of Sex Education Curricula in Protestant and Catholic Secondary Schools

町田 健一 MACHIDA, Kenichi

● 国際基督教大学
International Christian University



キリスト教主義学校, 性教育, 聖書科 (宗教科・倫理科) カリキュラム

Christian Schools, Sex Education, Bible Teaching in Secondary Schools

ABSTRACT

今日、キリスト教主義学校には、高いレベルの学問的学びとともに、キリスト教倫理・価値観に根ざした生き方の学びが期待されている。とりわけ「生命の尊厳」「人権」「生き方」「人を愛するということ」の教育を重要課題とするキリスト教主義学校において、それらを最も具現化する教育が「性」の学びであり、それはまた、子どもたちの人生を大きく左右する課題である。性教育については、多くの教員が避けたがる現実があるが、キリスト教学校教育として世の中の動きに抗して、子どもたちを救済し、より良い道に導くかは、待ったなしの研究課題である。

2009年6月に、中等教育レベルのカトリック学校120校、キリスト教学校104校に調査用紙を郵送し、宗教主事等のキリスト教教育の責任者にキリスト教主義学校としての性教育の現状を尋ねた。主要な問いは、(1)聖書科の教員は、聖書科の授業において、どのように性教育に携わっているか、(2)他の教科の教員たちと、性教育ではいかに連携をとっているか(指導的な立場を取っているか)、(3)キリスト教主義学校としての性教育のあり方にどのような見解・態度で臨んでいるか、である。

キリスト教学校52校(同50%)、カトリック学校52校(回収率43%)から回答を得た。調査の結果、聖書の授業、宗教的なプログラムにおいて、キリスト教倫理に基づく系統的な性教育の内容が組み込まれているケースは非常に少なかった。キリスト教主義学校の現実には、性教育を行う保健体育の教員、養護教諭、理科教員、家庭科教員、担任、カウンセラーの多くがnon-Christianであり、避妊、性感染症、エイズ

教育等が中心テーマで、関連したキリスト教倫理・価値観の指導がほとんどの学校で組織的になされていない。聖書科教員、宗教主事等、宗教部に対して聖書科カリキュラムおよび学校の宗教的プログラムの中で積極的な取り組みが期待されている。

Contemporary Christian schools in Japan are expected to equip their students not only with a wealth of academic knowledge but also with a lifestyle conducive to Christian ethos and ethics. As such, sex education, focusing on “respect for human lives,” “human rights,” “ways of living” and “agape,” is considered as foremost and critically important in Christian education; however, many teachers are reluctant to teach such topics.

One hundred-four (104) Protestant and 120 Catholic secondary schools participated in a survey in which they were asked about: 1) how and in what content areas Bible teachers could contribute to sex education; 2) how these teachers could collaborate with other teachers, and 3) opinions and attitudes concerning sex education at Christian schools.

The results indicated that Bible teachers and chaplains at these schools were pivotal to providing sex education based on Christian philosophy and ethics. Also, other teachers in health education, home economics, and biology, as well as school nurses and school counselors often found themselves teaching sex education classes. Most of the latter teachers in Christian schools do not profess their faith in Christianity and conduct sex education not on the basis of Christian understanding. This paper strongly suggests that Bible teachers or chaplains play a central role in providing sex education by integrating it with their religious program in schools, and a recommendation was advanced as to how these teachers take on sex education more seriously.

1 問題の背景と研究の概要

今日、青少年の性意識・性行動の実態は、目を覆いたくなるような状態であり⁽¹⁾、その結果として異性に対して強い不信感やトラウマを持ち、さらには結婚・家庭の在り方を根底から揺るがす事態となっている。

それゆえ、多くの親たちはキリスト教主義学校に、高いレベルの学問的学びとともに、むしろキリスト教倫理・価値観に根ざした生き方の教育を期待し、子どもたちを送っている。しかし残念ながら、キリスト教主義学校であっても、生徒たちは同様の大きな問題を抱えている⁽²⁾。本学に学ぶ学生たちを中心にした調査や教育相談によれば、キリスト教主義学校出身者でさえ、社会の風潮に染まり、一般の中高出身者と変わらない性に対する考え方をもち、問題行動をとっている⁽³⁾。

一方、性教育については、多くの教員が避けたがる現実がある。しかし、キリスト教主義学校は世の中の動きに抗して、子どもたちを救済し、ど

のようにより良い道に導くか、待ったなしの研究課題に取り組む必要がある。とりわけ「生命の尊厳」「人権」「生き方」「人を愛するということ」の教育を重要課題とするキリスト教主義学校においては、それらを最も具現化する教育が「性」の学びであり、それはまた、子どもたちの人生を大きく左右する課題だからである。

一般に、性教育は、保健体育科、家庭科、理科の各教員⁽⁴⁾や養護教諭、生徒指導部教員、担任が、また、スクール・カウンセラーが生徒に個別に対応している。しかし、指導要領に則り保健等の授業で教科書をなぞる程度の学校から、使命に燃える教員がかなりの時間をかけて行っている学校まで大きな差があり、年に1回程度の講演を組む程度の事例が多いと言われ、教員がチームを組み、学校としてカリキュラムを作成・実施している学校は非常に少ない。

さらに大きな課題は、それらの教育内容がいかなるものなのか、である。現在日本で行われている性教育の主流は、特に80年代にアメリカから輸

入したSIECUSの性教育であるが、今日のアメリカはすでに10年以上前に、それまでの教育内容の反省とともに大きな転換をしている⁽⁵⁾。さらなる今日の日本の性教育の課題は、最前線で活躍している教員の受けた教育内容が80年代のアメリカの性教育内容であり⁽⁶⁾、キリスト教主義学校も、指導教員に関して同じ問題を抱えていることである。「現在、キリスト教学校主義学校における性教育はどのように展開されているのか？キリスト教主義学校における性教育は誰が担うべきか？」が本論文の背景にある問いである。

まず、性教育研究の一環として、アメリカ・カナダのキリスト教主義学校をモデルにしようと、2007年度から2008年度にかけて、アメリカ・カナダの主として西海岸から中部にかけてのキリスト教主義学校を15校訪問、取材した。訪問校はいずれもカリフォルニア・コードに代表される「abstinence」に則った性教育を行う「Health」の教科書を使用し、いずれも100%クリスチアンの教師で運営されている学校である。しかし、性教育は主としてHealthの教科担当教員があたり、「abstinence」に触れてもキリスト教倫理・価値観の指導はしておらず、それは聖書科の教員のすべきこと、とのスタンスであった。しかも、聖書科教員にインタビューをすると、ほとんどの教員が、「聖書物語を扱う時に触れる事もある」程度であり、社会的にも論争となっている時事問題を扱う高学年で、10代の妊娠や中絶、シングルマザー等の問題を考えさせる」とのことで、「キリスト教の教えを紹介するに留める」というものが大半であった。3校の聖書科教師のみが、「聖書物語の中で性教育を意識的に行っている。なぜなら、聖書に基づく生き方として、彼らの人生で最も大事な学びだから。」また、「聖書の授業は、キリスト教の性倫理を教えられる唯一の授業でしょう。」と語ってくれた。

上記の調査に加え、2008年度より、日本のキリスト教主義学校の7校に事前調査としてインタビューを行った⁽⁷⁾。アメリカとカナダの上記事例とほぼ同様の状態であることを確認した上で調査項目を作成、今回日本のキリスト教主義学校に

対して調査を行い、キリスト教主義学校としての性教育の可能性・課題を論ずることにした。本論文では、キリスト教学校教育同盟に属するプロテスタント系学校を「キリスト教学校」、カトリック学校連合会に属する学校を「カトリック学校」、総称して、「キリスト教主義学校」と呼ぶことにする。

2009年6月に、中等教育レベルのキリスト教学校104校、カトリック学校120校に調査用紙を郵送し、宗教主事等のキリスト教教育の責任者にキリスト教主義学校としての性教育の現状を尋ねた。学校としての宗教的プログラムを含め、特に聖書科（宗教科・倫理科）に焦点をあてての調査である。主要な問いは、(1) 聖書科の教員は、聖書科の授業において、どのように性教育に携わっているか、(2) 他の教科の教員たちと、性教育ではいかに連携をとっているか（指導的な立場を取っているか）、(3) キリスト教主義学校としての性教育のあり方にどのような意見・態度で臨んでいるか、である。

キリスト教学校教育のまさに指導的立場に立っておられる方たちの見解、実践をもとに、今後のキリスト教主義学校の性教育の可能性と課題を論じることとする。基本的に多肢選択の回答結果を数値的にまとめ、自由記述のまとめを加える。

2 キリスト教主義学校における性教育の現状

本節では、キリスト教主義学校の調査結果をまとめる。キリスト教学校52校（同50%）、カトリック学校52校（回収率43%）から回答を得た。中学校のみの学校はキリスト教学校5校、カトリック学校3校、高等学校のみの学校はキリスト教学校7校、カトリック学校7校と非常に少なく、各問とクロスさせても特に特色は見られなかった。

男子校はキリスト教学校4校、カトリック学校7校、女子校はキリスト教学校22校、カトリック学校37校であった。共学校は、キリスト教学校が26校、カトリック学校は8校と、カトリック学校の共学校は非常に少ない。約10年前のキリスト

教学校のインタビュー調査では、男子校ではすべて性教育に消極的で、積極的な取り組みがまったく見られなかったが、今回の調査では、サンプル数が少なく断定的には言えないが、かなりの取り組みをしている学校もあり、単発の講演だけの学校もあるが、指導要領による教科の指導以外にまったく行わないわけにはいなくなっていることが分かった。女子校は、ほとんどすべての学校が基本的に何らかの形で性教育を行っており（キリスト教学校で1校のみ無回答校あり）、カリキュラム化して男子校より熱心に行っている様子が見られる。ただし、聖書科による実践率が高いのではなく、学校としての実践率が高いのであって、この問題は後に議論する。女子校と共学校との比較は、データの断定的な差を論ずることは難しかった。

一方、キリスト教学校とカトリック学校を比較すると、いくつかの事柄で差が出ている。特に、聖書科教員が主として性教育を行っている事例は、キリスト教学校で8校（15%）、カトリック校28校（54%）で、カトリック学校はキリスト教学校に比べて非常に高い数値であり、聖書科を含めた様々な立場のスタッフがチームで関わっている学校が2校ある。他のいくつかの違いは以下のまとめの中で明らかにする。それらの項目以外では、キリスト教学校とカトリック学校では大きな差が見られないため、基本的に、キリスト教学校、カトリック学校をまとめて「キリスト教主義学校」の課題と可能性としてまとめることにする。調査項目としての各問と回答結果は以下の通りである。各回答結果に対する考察は後にまとめて行う。

<聖書科の授業として>

(1) 聖書科として、性教育の内容をいかに扱うか、聖書科教員で話し合ったことがありますか？

	キリスト教学校	カトリック学校
はい	9校 (17%)	20校 (38%)
いいえ	38校 (73%)	26校 (50%)
どちらとも言えない	5校 (10%)	6校 (12%)

「いいえ」の回答校であげられている主な理由は、以下の通りである

- ・「聖書科／宗教科」のカリキュラムにない
- ・「保健」保健室等で扱っているので、「聖書科」で扱う必要を感じていない
- ・担当者が一人のため、もしくは、各担当者（牧師／司祭）に任せてある
- ・男子校であり、性差に関心がうすい
- ・話し合うだけの時間的・内容的余裕がない

これを機会に（聖書科における性教育を）検討する、という回答も見られた。

(2) 性教育の内容を学年配当して適切に扱っていますか？

	キリスト教学校	カトリック学校
はい	15校 (29%)	28校 (54%)
いいえ	30校 (58%)	16校 (31%)
どちらとも言えない	7校 (13%)	8校 (15%)

学年配当に、決まったパターンはないようで、早い所では中1、遅い所では高3のみという学校がある。中学校では中2～中3、高校では、キリスト教学校では高2、カトリック学校では高3がやや多いようだ。

「いいえ」の回答校であげられている主な理由は、以下の通りである。

- ・「聖書科として性教育」という発想がない／必要を感じていない
- ・宗教（聖書科）のカリキュラムに性教育を位置づけていない
- ・性教育は聖書科でなく家庭科、保健体育科が担当している

特記すべきことは、「性教育は聖書科の範疇でない」という考え、「性教育として聖書科が扱う内容は生命倫理」のみという考えがあることである。

- (3) 聖書物語を扱う時に、性教育の内容（性倫理等）を意図的に扱っておられる聖書科教員が御校におられますか？

	キリスト教学校	カトリック学校
はい	12校 (23%)	13校 (25%)
いいえ	37校 (71%)	31校 (60%)
わからない	3校 (6%)	8校 (15%)

聖書物語を扱う折に、教訓として、性に関する学びを取り入れる事例としては、以下の聖書物語が多く用いられている。

- 創造の物語（創世記1, 2章）：祝福された結婚、性
- ノアの洪水までの物語（他ソドムとゴモラ等旧約の物語）：罪の結果として入ってきた性の乱れ
- サムソンの物語：正しい交際
- ヨセフの物語：性的誘惑に勝つ
- アムノン、タマルの物語：性の欲求の問題
- ダビデとバテシバの物語：不倫の罪
- アブラハム、ヤコブ、ダビデ、ソロモン等の物語：一夫多妻の問題
- 十戒の物語：姦淫の罪（心の問題を含む）
- 姦淫の場で捕らえられた女性の物語り：姦通・不倫の問題とキリストの許し

- (4) 聖書物語ではなく、時事問題等、社会的に、またはキリスト教会で論争となる問題を扱う時に、性教育の内容を取り入れていますか？

	キリスト教学校	カトリック学校
はい	24校 (44%)	25校 (48%)
いいえ	26校 (50%)	17校 (33%)
わからない	3校 (6%)	10校 (19%)

時事問題については以下の事柄が指導されている。

- 中絶、避妊の問題：生命の尊さ、生命への責任
- 離婚問題：結婚の尊さ、生涯伴侶を大切にする意義
- 「赤ちゃんポスト」生命の尊さ
- 性感染症、エイズ：社会倫理、性倫理
- 売買春：性倫理
- 痴漢、ストーカー、男女問題による刺殺事件：社会倫理、他者への配慮
- 不妊治療、人工授精、出生前診断：生命倫理
- 胎児の細胞利用、ips細胞とES細胞：生命の始まり、生命倫理
- クローン：いのちの始まり
- ジェンダー：男女平等
- DV問題：性差別、人間の尊厳
- アフリカでの「割礼」：キリスト教的性的見方
- セクシャルマイノリティー：人権の尊重

(5) キリスト教教育として、性の問題は重要なテーマですが、聖書科の今後の課題として考えられるものはどれですか？（複数回答可）

① 聖書科教員同士の連携

キリスト教学校	カトリック学校
23校 (44%)	19校 (37%)

② 他教科教員との連携

キリスト教学校	カトリック学校
36校 (69%)	41校 (78%)

③ 自分自身の性教育に関わる知識、または、指導場面・方法を含む扱い方

キリスト教学校	カトリック学校
27校 (52%)	32校 (62%)

④ 聖書科の時間不足（性教育の内容まで時間を割けない）

キリスト教学校	カトリック学校
19校 (37%)	13校 (25%)

⑤ その他

キリスト教学校	カトリック学校
10校 (19%)	6校 (12%)

特記すべきことは、以下の回答である。

- ・あえて“性の問題”を聖書科で取り上げる必要があるのか疑問
- ・聖書科の時間不足
- ・自由主義に対して、また時代の風潮に十分論破する学びができていないこと
- ・現代の生徒の実体を捉える必要
- ・聖書科のみならず、学校としてキリスト教的性教育の共通理解が必要
- ・小中高一貫教育を行う中で、どの段階における性教育が必要か等についての認識がされていないこと
- ・学校としてのカリキュラムの見直し
- ・プロテスタント系キリスト教学校の一致した取り組みが必要
- ・聖書的、キリスト教的な性教育を確立する必要（「生きることは愛すること」、愛とは？）

(6) 聖書科として性教育を行う際の壁（抵抗）とはどのようなものですか？（複数回答可）

① 「性教育は聖書科で行う内容と思わない」という考え（価値観の押し付けになる等）

キリスト教学校	カトリック学校
13校 (25%)	4校 (8%)

② 世の中の動きに抗しきれない（他教科の教師、親、生徒達の言動に）

キリスト教学校	カトリック学校
7校 (13%)	9校 (17%)

③ 学校において性教育はタブーで、表立って議論できない、または、避けている節がある。

キリスト教学校	カトリック学校
2校 (4%)	1校 (2%)

- ④ キリスト教の考え方、そのものを学校で扱えない雰囲気である。
- | | |
|---------|---------|
| キリスト教学校 | カトリック学校 |
| 0校 (0%) | 0校 (0%) |
- ⑤ その他
- | | |
|-----------|-----------|
| キリスト教学校 | カトリック学校 |
| 35校 (67%) | 38校 (73%) |

アメリカ、日本における事前調査では、上記①～④が「聖書科で性教育を行う時の壁」として言われた項目であったが、今回の調査では、それ以外のことがらが多く回答された。

「その他」として書かれた特記すべきことは、以下の通りである。

- ・特に壁は感じない
- ・教職員の性教育に関する考え方の違い
 教員間の温度差／女性教員と男性教員とではアプローチの違いがある
- ・性教育についてのコンセンサス／カリキュラムが確立していない
- ・教員自身の問題意識、学問的見識・勉強不足、扱いにくさ
- ・担当者が、ある一定の基準で内容を研究し、同質のものを提供できるようにする時間の問題
- ・週1時間の授業時間では扱えない
- ・聖書から、性教育の内容を生徒が理解するのは難しい
- ・重要なことなので、これから積極的に取り入れるべき
- ・すべての科目で行うべき

しかし、現在の家庭科、保健等の指導は聖書的でないと、危険視する向きもある。

<聖書科の授業以外の「宗教的プログラム」において>

どのようなプログラムにおいて、キリスト教の立場で性教育を行っておられますか？（複数回答可）

①「総合的な学習」の時間で

キリスト教学校	カトリック学校
8校 (15%)	12校 (23%)

具体的には、複数校で「人間学」「生活」と名付けた授業で、「結婚と性」のようなテーマを扱っている。その折、単独の教師で指導しているケースもあり、また、「総合的な学習」担当メンバーとして、聖書科、保健・体育科、家庭科教員と授業内容を共に検討しているケースも複数見られる。課題として、「すべての教員がキリスト教的価値観で指導できるようにすること」があげられている。

②週に一度の集会（アセンブリー／チャペルアワー等）や、年一度講師を呼ぶなどして行う

キリスト教学校	カトリック学校
3校 (6%)	3校 (6%)

特記すべきことは、毎年1回外部講師を呼ぶ例もあるが、担当者任せ、3、4年に一度など、学校として特別に企画されていないことである。

③毎朝の礼拝時（朝礼、祈りの時間等）に適宜織り込む（説教者任せ？／計画的に？）

キリスト教学校	カトリック学校
8校 (15%)	4校 (8%)

基本的に説教者任せで、学校が意図的に企画していない。カトリック学校の事例として、「いのちへのまなざし」という根本的な観点から触れられることもある。

- ④ クリスチャン・ウィーク／祈祷週などで、特別プログラムとして
- | | |
|---------|---------|
| キリスト教学校 | カトリック学校 |
| 3校 (6%) | 3校 (6%) |

ほとんど事例があげられていなかったが、以下の事例が見られた。

- ・過去に宗教週間の特別企画で「いのち」との関わりで講師依頼をした
- ・人権教育の一環としてセクシャルハラスメントへの注意をした

- ⑤ 文化祭の中で
- | | |
|---------|---------|
| キリスト教学校 | カトリック学校 |
| 0校 (0%) | 2校 (4%) |

基本的に生徒の自主企画のためか、宗教部によって意図的に企画されていない。

- ⑥ その他
- | | |
|-----------|-----------|
| キリスト教学校 | カトリック学校 |
| 32校 (62%) | 34校 (65%) |

「その他」においては、以下の記述が見られた。

- ・聖書科、宗教部としては「特に行っていない」
- ・寮における生活指導において行っている
- ・年1回の「命の教育」／外部講師を招いての人権教育・性教育／「保健セミナー」
しかし、これらは宗教部が関わっていないことが多く、キリスト教の見解が得られないことがあることを憂いている記述がある。カトリック学校では、特に学校をあげての取り組みの事例がある
- ・「人間学」で／保健、理科、宗教タイアップで／校長講演で／国語科教材で
- ・錬成会（カトリック学校）の中で、半日の性教育

<他教科の教員との連携について>

聖書科として、性教育の内容をいかに扱うか、他教科の教員と連携できていますか？

	キリスト教学校	カトリック学校
はい	9校 (17%)	18校 (35%)
いいえ	30校 (58%)	26校 (50%)
どちらとも言えない	13校 (25%)	8校 (15%)

「はい」の事例においては、総合的な学習担当メンバーとして、聖書科、保健・体育科、家庭科教員、養護教諭と授業内容を共に検討されている事例があった。

「いいえ」の回答校であげられている主な理由は、

- ・「聖書科で扱っていないので連携していない」が多い
- ・他（保健、家庭、生活指導部）に任せている／聖書科では必要性がない
- ・他教科との信頼関係が出来ていない
- ・観点が違い、価値観の共有・分かち合いができない

「どちらとも言えない」の回答校であげられている主な理由は、以下の通りである。

- ・保健との連携を模索中
- ・個人的な意見交換程度
- ・過去には「女性学」をまとめた頃に連携が見られた
- ・他の教員との関係性や考え方によってできるかできないかがある
- ・男子校なので、必要に応じて、いつも話すことはない

「はい」の回答校で連携できている教員（教科等）は以下の通りである。
（この項目のみ、以下「はい」と回答した9校（キリスト教学校）、18校（カトリック学校）をそれぞれ分母）

①「保健・体育科」担当教員

キリスト教学校	カトリック学校
9校（100%）	16校（89%）

その内容は、

- ・保健で扱った内容を確認、聖書科の展開を考えた
- ・指導内容を確認し、命は授かるものであるという基本方針を共有
教科書や教材・授業内容の共有
- ・キリスト教倫理の重要性の共有
- ・「自然な」家族計画についての共有（カトリック学校の事例）
- ・女性性を生きることの意義について共有

②「家庭科」担当教員

キリスト教学校	カトリック学校
2校（22%）	7校（39%）

その内容は、キリスト教における「性」について話し合う、という事例があった。

③「理科（生物）」担当教員

キリスト教学校	カトリック学校
0校（0%）	6校（33%）

具体的には、以下のような事例があった。

- ・（生物）命の起源、生きることの大切さ、生き物を通して人間の性を学ぶ
- ・中3に週1時間「生命について考える時間」を設置

④ 養護教諭（保健室の教員）

キリスト教学校	カトリック学校
5校（55%）	11校（61%）

以下のような具体的な記述があった。

- ・教えた内容、教材について情報交換
- ・「思春期の身体と心」の2時間授業を協力して行う（中1）
- ・性交渉・避妊は結婚式後のことであることの共通認識（カトリック学校）

⑤ 担任

キリスト教学校	カトリック学校
2校（22%）	6校（33%）

具体的には以下のような関わりを持っている。

- ・授業で扱う前に、生徒の家庭環境や刺激の度合い等、留意事項を聞く
- ・生徒について情報交換、問題の把握

⑥ その他

キリスト教学校	カトリック学校
5校（55%）	7校（39%）

「その他」に記述された連携相手は以下の通りである。

- ・寮の舎監

- ・学年会教師
- ・学年の宗教委員教師
- ・教育相談部主任
- ・カウンセラー

<外部の機関／専門家との連携について>

聖書科として、性教育の内容をいかに扱うか、外部の機関／専門家と連携できていますか？

	キリスト教学校	カトリック学校
はい	5校 (10%)	10校 (19%)
いいえ	42校 (81%)	34校 (65%)
どちらとも言えない	6校 (12%)	10校 (19%)

「はい」の回答校の事例は、

- ・小さな命を守る会（6人の理事がすべて牧師）
- ・キリスト教倫理学の大学教員
- ・カトリック司祭
- ・スクールカウンセラー，エイズカウンセラー
- ・県や市の公の機関から
- ・生命尊重センター／地域の「いのちを大切にする会」

「いいえ」の回答校であげられている主な理由は、

- ・現状での必要を感じていない
- ・内部で行っている
- ・独自の学習による
- ・時間と準備，情報不足
- ・外部の講師の性に対する考え方はキリスト教のものと異なることが多い

「どちらとも言えない」の回答校であげられている主な理由は、

- ・性教育委員会が中心に行っている
- ・スクールカウンセラー等連絡をとる専門家はいるが，連携までしていない

学校として（宗教部／聖書科とは関係なく保健室等の企画として）、性教育の内容をいかに扱うか、外部の機関／専門家と連携できていますか？

	キリスト教学校	カトリック学校
はい	19校 (37%)	25校 (48%)
いいえ	14校 (27%)	19校 (37%)
どちらとも言えない	19校 (37%)	8校 (15%)

「はい」の具体的対象は、

- ・大学の教員、
- ・医師（産婦人科，婦人科，校医），助産師，保健師
- ・カウンセラー
- ・少年サポートセンター
- ・“人間と性”教育研究協議会
- ・ロータリークラブ
- ・市の男女共同参画課出前講座／保健予防課
- ・小さな命を守る会（キリスト教教会関係）
- ・カトリック司祭

「いいえ」の回答校であげられている主な理由は、

- ・そこまでの問題意識を持っていない

- ・特に考えていない
- ・外部の人の性に関する考えはキリスト教のものと違っているから

「どちらとも言えない」の回答校であげられている主な理由は、

- ・個別指導の際に、必要に応じて、専門医、カウンセラーと連携
- ・聖書科として連携することについて発想がかけていた
- ・本校がミッションスクールであることがどの程度理解されているか不明

特記すべきことは、以下のいずれもがカトリック学校の不安、問題点の指摘である。

- ・外部の、特に日本性教育協会／“人間と性”教育研究協議会の教えに問題を感じている
- ・キリスト教的／カトリックの見解が得られないことがある
- ・性の精神的・倫理的意義よりも、病気の予防、避妊・安全なセックスのみが強調されてしまう

＜キリスト教としてのメッセージ＞

特に、(聖書の授業に限らず)すべての宗教教育活動を通じて、強調しておられる「性に関するキリスト教の重要なメッセージ、原則」を、いくつかあげて下さい。

その折に引用される聖書の箇所を()書きで示して下さい。

以下の項目が挙げられている。

神の似姿としての男女としての人間(創世記1章)

ふさわしい助け手(創世記2:18)

性は神が与えたもの、祝福(創世記1:27)

結婚関係は2人だけのもの(創世記2:24)

キリストが教会を愛したように愛する関係、主の前に男女は平等であり、お互いに大切にしよう「人格的交わりの性」(エペソ5:21～33、1コリント13章)

子供は神からの授かりもの(創世記、サムエル記他)

私たちの体は、神から頂いた聖霊が宿っている神殿であること:(1コリント6:15～20)

夫婦は生涯共に歩む事:(マタイ19章)(マルコ10:1～11)(エペソ5:21～33)(1コリント7:1～16)

姦淫してはならない(出20:14)

いとうべき性関係(レビ18章他)

回復、許しのメッセージ(ヨハネ8:7～11他)

特にこれらの項目を聖書科を中心としたカリキュラムに組み込んでいる学校の事例を挙げておく。

この事例で特記すべきことは、高1で1年間、(1)自分への問いとして、「私は何を知りたがっている人間なのか?聖書から何を知りたいのか」(2)問われる者として、「聖書は私に何を問うてくるのか?私はどう応答するのか」のテーマで、自分の内面を徹底的に問う授業が展開されていることである。単に聖書物語を追うものでない展開の上に、高2の「聖書科」前期で、「聖書に聴く聖書が語る男女の問題」と題して授業がなされ、さらに「人間学」の授業で、性に関する時事問題を考えさせている。人間教育としての性教育が行われている。教派によっては、その教派としての聖書科のモデルカリキュラムが明示され、このような

自由な聖書科の展開が許されないかもしれないが参考までに記す。

高校2年聖書の授業では、前期(4～7月)に以下の項目で聖書から性についての課題を学ぶ:

- (1) 人の創造と生命の尊厳、(2) 結婚の神聖(聖書の結婚観、結婚の秩序)、(3) 罪の本質、(4) ソドムの滅亡(人の墮落は性に現れやすい)、(5) 一夫一婦の意義(イサクの結婚から)、(6) 一夫多妻の弊害(ヤコブの家庭から)、(7) 女性の被る危険性、性暴力(ディナのシテムでの出来事から)、(8) ダビデの結婚と家庭(権力者の傲りと一夫多妻)、(9) ダビデとバトシェバ事件(権力者の傲りと姦淫)、(10) アムノンとタマル事件とその後の悲劇(欲望の脱線、家庭における教育)、(11) ホセアの家と苦悩(ホセアを通して教え

られる神の愛), (12) 山上の説教よりイエスの「姦淫」に関する言葉, (13) 姦通の女(罪の裁きと赦し), (14) パウロの結婚に対する信仰的理解, (15) 神の国の完成時.

項目としては, 聖書に書かれた暗い出来事が並ぶようであるが, 生徒たちの感想文からは, 教師の熱心な指導, 考えさせる授業展開によって, むしろより良いあるべき姿を学び取っていることが伝わってくる.

一方, 高校2年対象の教科『人間学』においても, 「性と結婚」について, 現代の社会問題として話す時間がもたれている. (1) 現代における性の退廃(「つき合っている」は性関係があること? 結婚前の妊娠, 妊娠中絶による殺人, 「できちゃった婚」は当たり前?), (2) 現代における結婚する都合(経済的都合, 心理的都合, 性的関係の都合, その他), (3) 聖書から教えられる結婚(結婚は神の創造の秩序の中にある. 結婚は神の祝福の中にある. 結婚は一組の男女が共に神の前に一体と認められること. 結婚は愛の学習の場

である. 結婚は一組の男女が神の計画に参加すること. 結婚のゴールは男女が共に復活の生命に与ること.), (4) 結婚の中の愛(エロスとアガペー, 結婚生活には両方とも大事), (5) 結婚の順序(性関係→結婚:非常に不安定, 恐れと不安を伴う. 結婚→性関係:祝福の中で安定, 喜びがある), (6) 結婚前の男女の姿勢(性的な話題への関心と自己を制御する力), (7) エイズや性病から身を守るために(世界では実に不幸な人たちがいる. 一人ひとりのこころの姿勢で決まることがある), (8) 性産業と人身売買(世界では実に不幸な人たちがいる. 一人ひとりのこころの姿勢で決まることがある.), (9) 麻薬の浸透(入るに簡単な世界だが抜けるのが非常に難しい世界), (10) 性の退廃は滅亡に至る(学園創立者の卓見), (11) 結婚まではセックスをしてはいけない(これは神の恵みによる戒めである), (12) 祝福の中の結婚の楽しさ(神によって結ばれた結婚は苦労があっても楽しいものだ)

<性教育に対する見解>

宗教活動の責任者(校長,あるいは,宗教部主事,聖書科主任等)として,性教育に対する一般的な感想,ご意見をお書き下さい.

この問いに対して多くの回答があったが,代表的なものを列挙する.

- ・思春期における性教育は大切である.身体的側面だけでなく生き方の問題として取り上げるべきである.
- ・性教育は人格教育の中に位置づけられるべきである.
- ・(性教育は)全人格の形成を目指す学校として欠かすことのできない重要な分野.入学~卒業にかけてまんべんなく,発達段階を見据えながら,カリキュラムを組み実施して行く事が大事.家庭の協力も必ず呼びかける.世間のモラル低下にふりまわされず理念を追求すべき.
- ・中絶や避妊等の狭いレベルで性教育をとらえるようなことはしたくない.創世記のメッセージにもあるように,人間は神の似姿であり,男と女が良きパートナーであるという視点から一人一人を大切にすることがどういうことなのかを考えることがキリスト教的視点に立った性教育だと思う.本校は男子校なのでこの点をしっかり確認した上で性に関する話をしないことには中絶や避妊などの問題は興味本位の話で終わって問題が深まらない.
- ・保護者からも,思春期にキリスト教的な見地から男性と女性のあり方について学ばせて欲しいという願いがある.神に与えられた男女の結びつきというキリスト教独自の倫理観を伝えていく必要があると考えている.
- ・身体的(生理的)な事柄に関わる知識の獲得と,キリスト教的価値観・倫理観の結びつきがとても難しく,キリスト者の中にも多様な考えがあり,寛容さ(乱れ?)も様々なため,社会(学外)の事柄以前に学校内の在り方が問われると思う.
- ・性と聞くと,何となく性のマイナス面をイメージしてしまうのは何故だろうか?(一般には)性が神様からの祝福であるという価値観を持たせてやれないまでも,少なくともプラス面にフォーカスできないだろうかと素朴に感じる.
- ・性教育とは,人格と切り離す事はできない.逆に言えば,人格教育の中に性をどう捉えるかという視点で

- 考える必要がある。性そのものが、自由に扱われるものでないという根本的な性に対する姿勢が、人格教育の中でしっかり育てられる事が土台となり、それから性を扱ってゆくという順番をとることが大切なのではないかと思っている。性というものに関しては禁止事項として扱うのではなく、自らの選択によって正しい選択が（結婚までは、性交渉しないという）できるように導く事が重要であると考えている。
- ・聖書全般、またカトリック教会の文書に基いて、しっかり原則的なことを教えると同時に生徒にとってもっと身近な問題を取り上げ、具体例を示しながら、考えさせていくことが大切だと思う。
 - ・ミッションスクールの性教育は神が原点になるので、はっきりと命の大切さや自分・他人の身体の大切さを話す事ができる。教える立場にある者は当然、きちんとした知識を身につける事、判断力を身につける事が要求される。学校独自の教育があってもよいが、キリスト教の学校としての理念や信念をもっと強く打ち出しても良いと思う。
 - ・中高一貫ということで、性教育に関しても、系統立てて行っていくには適していると思うのだが、既に書いた様に、まだ、きちんとした話し合いや教科等への盛り込み、他教科との連携が始まっていない。早急に取りかかる事が必要だと思っている。
 - ・性・愛・生命・尊厳・幸福など、生き方・在り方を現代の諸問題とともにとりあげ、様々の方面からかんがえさせることによって、・・・医学的なことは他教科にまかせ、宗教は倫理以上のもの（これも含めて）が教えられる有意義な時間である。
 - ・他者をいたわる。人格を尊重するということと、性はイコールだということを教えている。俗にいう「出来ちゃった婚」は、いけないことだ、ということ。このことは、人格を尊重していないことだということ。
 - ・教師の言葉で教えるよりも、メッセージ性の高いビデオ教材や、プリント教材を使って、実際に起こっている問題を提示し、生徒がそれをどうとらえ、どう感じたかについてレポートなどの提出によって意見を集めて、教師がそれを問題別に編集して再提示するような授業が有効であると思う。できれば、性の討論やディベートができるとうい。このような方法によって、生徒たちの心の中にある倫理・道徳規範意識を刺激し、引き出すのが有効と思われる。
 - ・もっとカリキュラムにしっかり取り入れて行く必要を感じている。また、宗教科以外の先生方に、キリスト教的性教育（アプステナンス教育）を理解してもらうよう、職員会等で取扱っていきたい。

3 考察と提言

キリスト教学校とカトリック学校における性教育に対する取り組みには基本的に大差がない。一部に聖書科（宗教科・倫理科）として大変な努力・実践をしている事例や学校ぐるみで取り組んでいる事例が見られたが、残念ながらその数は非常に少なかった。また、各項目に対する回答の分析により、それぞれに大きな課題をかかえていることが分かった。

調査結果から、キリスト教学校とカトリック学校の多少の違い、特色をあげれば、聖書科教員が主として性教育を行っている事例は、キリスト教学校で8校（15%）、カトリック校28校（54%）であり、カトリック学校の方が「聖書科教員で性教育の内容について話し合ったこと」が多く（キ：17%、カ：38%）、「性教育の内容を適切に学年配当」して、より積極的に取り組んでいることが分かる（キ：29%、カ：54%）。また、他

教科の教員との連携も多くなされている（キ：17%、カ：35%）。一方、キリスト教学校では「性教育は聖書科で行う内容と思わない」の考え方が目立つ（キ：25%、カ：8%）。

これらの理由として考えられることは、自由記述にもあるように、カトリック学校は、カトリックの教え、すなわち、カテキズムや聖書以外の聖典による教えに忠実に、結婚外の性関係の禁止や自然な家族計画（避妊法）をはっきり打ち出して性教育に取り組んでいる学校が比較的によく、かつ、学内、および、外部講師を中心とした今日の避妊教育や性感染症・エイズ防止に偏った性教育に対する警戒感があるからであろう。

今日のキリスト教主義学校（キリスト教学校・カトリック学校とも）共通の深刻な問題は、クリスチャン教師が50%を超える学校の方がまれで、クリスチャンは校長と宗教主事以外ほんの数人と

いう学校がかなり増えてきている現実である。それゆえ、キリスト教主義学校において保健体育の教員、理科教員、家庭科教員、養護教諭の多くが non-Christian ということが多くなり（註に示したように学校訪問調査、および教育実習生の記述等による）、その性教育は、避妊、性感染症、エイズ教育等が中心テーマで、キリスト教倫理・価値観の指導がほとんどない。

今後の課題として第一に、本論文のはじめの根本的な問い「キリスト教主義学校の性教育の責任は誰が担うべきか？」の答えは、キリスト教信仰に固く立ち、キリスト教教育の根底を支えるキリスト教倫理・価値観を系統立て、論理的に指導する責任者である、基本的には宗教主事・聖書科教員と考える。回答校の中には、保健等の担当者でもなく、牧師でもないクリスチャンの教員がすばらしい指導をし、成果を挙げている事例もある。しかし、今回の調査から露呈したことは、緊急に学校挙げて取り組む必要と、宗教主事・聖書科教員の「性教育に対する意識改革と研究」である。課題は、神学部教職課程における聖書科教育法8単位の授業内容と、生徒指導論の授業内容の見直しであろう（2000年の免許法改正における過渡期の措置として、聖書科教育法が4単位から6単位で据え置かれている大学もある）。また、当然ながらキリスト教主義大学の教職課程における「生徒指導論」担当教員、「聖書科教育法」担当教員の育成も重要課題である。キリスト教学校教育同盟では委員会を立ち上げ、2007年度よりキリスト教主義学校のためのクリスチャンの教職員の後継者養成プログラムを企画し、さまざまな効果をあげてきた。その課題の一つにこの課題を加える必要があるだろう。

第二に、キリスト教主義学校は「性教育」をどう定義づけているかである。今回の調査に対する回答として、「性教育は聖書科の教育内容でない」「性教育は保健等、他の教科の範疇である」の考え方が根強く見られた。確かに、性教育を、生殖（妊娠・出産）、避妊・中絶、性感染症・エイズ教育と狭く捉えていれば、そのような考え方になるであろう。あるいは、聖書科は学問的に聖書を

釈義するものと考えればそのようなもなろう。しかし、小中高レベルの聖書科は、彼らの人生、生き方と結びつかねば意味がない。性の問題は彼らの人格形成の課題と密接に関係し、彼らの人生の土台となるキリスト教倫理・価値観と切り離して考えられないテーマである。

第三に、キリスト教教育としての性教育の重要な使命、伝えねばならないメッセージをどう捉えているかである。自信を持って「ABSTINENCE」、結婚まで待ちなさいと言い切る指導をしているキリスト教学校が少ないことが気になる。キリスト教学校が最も大事にすべき教育課題、それゆえ、聖書科教員に負う所が大きいのであるが、「避妊教育」でもなく、「性感染症・エイズ脅し教育」でもなく、「人を愛する」とはどういうことなのか、キリスト教の倫理観・価値観に根ざした、“相手に最も誠実になるべき”「性」について語って欲しい。それらは、繰り返すがキリスト教教育の重要な教育課題である①「生命の尊厳」、②「人権」、③「生き方」（「神の導き」「神の御心」を求めて）④「人を愛するということ」（「博愛」「自己犠牲」と、「何人も入り込めない夫婦の愛」の違い）の具現化であるのだから、さらにキリスト教学校に学ぶ青少年には、バルト（Barth, K.）の以下の主張を具体的に伝える必要があるろう：①性的関係は、結婚している夫婦の、（不倫等）他人は決して入り込むことのできないもの、肉体的な結合だけでなく精神的にも一体となるもの、生涯にわたるお互いの誠実な関係を意味している。その時、「性」は聖められ本来の美しい関係になる、②人間の性欲は、理性的にきちんとコントロールできるようにしつけられねばならない、③「性」が結婚した二人の間でのみ許される以上、正しい「結婚の決断の教育」がなされねばならない、④身体の欲求のみでなく互いに相手の人格を認めた上での、心の真に自由な交わりである。

第四に、荒廃しきった社会、雑誌やコミック、インターネットにどっぷり浸かった青少年に、態度変容、行動変容を起こさせるため、教員チームとして協力して内容・方法の構築にあたれるかである。回答校に見られたが、総合的な学習担当メ

ンパーとして、聖書科、保健・体育科、家庭科、理科、国語科の教員、養護教諭が授業内容を共に検討、聖書科教員が、そのプログラムが「キリスト教の理念に添っているか」の指導をしていることが望ましい。なぜなら、クリスチャン教員であっても、前述のSIECUSの性教育に則って指導しているケースが多いからである。

第五に、宗教主事・聖書科教員が性教育に関わる重要な意味である。それは、援助交際をも含む様々な失敗をし、罪意識に苦しみ、異性不信・トラウマに陥っている青少年に、「キリストの許しと回復の福音」を伝える責任である。キリスト教倫理・価値観の指導とともに、今日重視されなければならない重大テーマであり、あえて性教育の中心に宗教主事・聖書科教員を据えることを提案する理由である。

最後に、キリスト教教育としての性教育の整備の課題である。以下の3点を、今回の調査から見えてくる検討課題としたい。

- (1) 聖書科：聖書そのもの（聖書物語からの教訓、聖句の解釈）からの学びと時事問題からのキリスト教倫理・価値観の学び
- (2) 聖書科以外の宗教活動（学校としてのカリキュラム）：総合的な学習を中心とした学校挙げての性教育プログラムの構築
- (3) 教育相談の充実：キリスト教教育としてのガイダンス、カウンセリングの検討

持論を繰り返すが、クリスチャンの教員がいなくては、キリスト教教育はできない。しかし、クリスチャン教師がいるだけでは、キリスト教教育は完成しない。キリスト教教育としての性教育の整備に、校長、宗教主事・聖書科教員の信念とリーダーシップが期待されている。

註

- (1) たとえば、日本性教育協会『青少年の性行動：わが国の中学生・高校生・大学生に関する第6回調査報告』2006.11.10
- (2) 事例として、キリスト教学校の現高校3年生からの手紙の抜粋を記す。「付き合っている2人でいたらすることってセックスくらいしかない、と友人が言っ

ていて、・・・大人が知っているよりはるかに現実男女交際は乱れています。保健の授業でもコンドームの用い方は念入りにするのに、人格的な性の交わりや愛の話はこれっぽっちもなく、授業後先生に話しにいったら、それはちょっと堅すぎるんじゃない?と軽く流されました。キリスト教主義の学校でさえ、表では異性と外泊したものは退学と言いながら、授業では責任を持ってしっかり避妊をして、などと教えているのです。現代の若者（大人たちも?）の性の乱れは、正しい性教育（価値観や倫理観の部分を含め）がされていないことが大きいなと思ったのです」また、ICUには多くのキリスト教主義学校出身者が在席しているが、それぞれの学校における同様の問題を指摘する学生が多い（下記註(3)も参照のこと）。

- (3) 拙著「性教育における教育内容・方法の研究：授業及び教育相談による価値観形成に向けての取り組み」『国際基督教大学学報 I-A 教育研究』第42巻、2000年3月31日、1-22頁。
拙著「性教育におけるどのような情報が学生たちを態度変容・行動変容へと導いたか? ～キリスト教学校教育に携わる教員の養成と研修に対する提言～」『キリスト教教育論集』第12号、日本キリスト教教育学会、2004年5月20日、69-81頁
- (4) 各教科の指導要領には、発達段階に応じて、身体的発達、性感染症・エイズ防止、生殖、生命の誕生、家庭の在り方等の指導項目が記述されている。
- (5) SIECUS: Sexuality Information and Education Council of United State.
拙著「キリスト教学校教育における性教育のあり方に関する研究」『キリスト教教育論集』第11号、日本キリスト教教育学会、2003年5月20日、37-49.96頁参照
- (6) 1980年代後半から、特に性教育に熱心に取り組んだ教員は、アメリカのSUIECUSの影響を強く影響を受けた。特に日本性教育協会や“人間と性”教育研究協議会の研修を受けている。研修を受けた当時の若い教員が、現在40～50代の指導的立場になっている。また、性教育元年と言われた平成元年（1988年）改訂の指導要領（1991年より順次実施）に基づく、広く行き渡った性教育の副読本は日本性教育協会関連のものが多い。その副読本で学び、育った中高生が、30代の中堅教員となっているのである。
- (7) 性教育の現状を訴える卒業生教員のいるキリスト教主義学校7校（校長および卒業生）に、事前調査としてインタビューを行った。1997年より1998年に北海道から九州までキリスト教学校を訪問してキリスト教教育についての調査を行ったが、その折に行った性教育に関する聞き取り調査とほとんど変化はなかった。